

保育の変革を目指して(2)

—折々に考えたこと—

入江 礼子

保護者会の立ち上げから得たもの

変化の兆し

二〇〇六年一月に行つた二〇〇五年度二回目の「保育参加ウイーク」に参加後の話し合いでのことである。四歳児と五歳児の保護者が混ざつての話し合いであったが、四歳児の保護者がこんな感想を述べられた。「私は今、三番目の子どもがお世話になつています。上二人とは十歳以上年が離れているので、本当に久しぶりの幼稚園での一日を体験させていただきました。とっても懐かしいなと思いました。子どもたちの思い思いに遊んでいる姿を見て、よく次から次へと考えられるものだと感心しま

した。ところが一つ、びっくりしたことがあります。それはお弁当の時間のときのことなのですが、娘はまだ食べ終わつてはいませんでした。けれどお隣に座つていたお子さんが食べ終わつてすぐに遊び始めました。私はごちそうさまをする前に遊び始めるのが不思議だつたので『ごちそうさまをしなくていいの?』と聞きました。そうしたら『食べ終わつたら、静かに遊んでいいんだよ。もう少し食べ終わつた人が多くなつたらみんなでごちそうさまするの』との答えが返つてきました。ちょうどそのとき、ほかのお子さんが『タンバリン』をたたき始めました。その音がするので娘もだんだん落ち着かなくなり、食べ

ることへの集中がなくなつてきました。私はおかしいと思うのですよね。やっぱり食事のときはごちそうさまが終わるまでは少しは静かに過ごせないものでしようか。

もちろんこれを幼稚園にすべてお任せしようとは思つていません。この食事のときのしつけは家庭での責任でもありますから、私も気をつけようと思つています」。

続いて次の保護者の方はこんなことを述べられた。
「今日は、息子ととことん付き合おうと思つてきました。家では私が自分の仕事をしてしまって、ついつい子どもが後回しになり、息子の落ち着きがなくなつてきていたのです。ですから今日はいっぱい遊びに付き合いました。これで少し落ち着いてくれるのかなと思つています。それともう一つ、生活面がどうなつてているかも知りたかったので、ロッカーの中をのぞいてみました。そうしたら案の定、着替えた洋服も、作ったものもごちやごちやになつていて、遊んだあと私はそのロッカーの片づけをしました。息子はお弁当後の片付けもひどく、お弁当箱を包まず、そのまま、園かばんに突っ込んでいまし

た。本当に恥ずかしく思いましたが、こういうことは園と家庭の二人三脚でやつていくものだということを痛感しました。家でもがんばりたいと思います」。

この二人の保護者の方の発言のなかに私たちが五年間待ち望んでいた言葉があった。それは「家庭でも気をつけてますから」「こういうことは園と家庭の二人三脚でやつしていくものだということを痛感しました」という二つである。こう書いてしまうと、まったく当たり前のこのようにみえるが、このような言葉が保育参加ワイヤーク後の話し合いに出たのは初めてのことであつた。いつもはたいてい「これは、どうなつてているのだろう?」という疑問は「幼稚園の方で何とかしてほしい、幼稚園のしつけがなつてない」ということを言わんが為に發せられていた。もちろん私たちにもいろいろな至らなさがあるので、園の責任と考えてこれを真摯に受け止め、改善点は改善すべくがんばつてきた。でも正直なところをいふと「これは園だけの責任ではない。むしろ家庭のしつけ、あるいは家庭がきついからこそ、幼稚園でこんな姿

が「出るのではないか」と、親に向かって「園としても気をつけてやつていただきたい」という言葉を返したこととは裏腹に、そんな反発をもつたことも事実である。つまり「共に支え、つながり、育ちあう」という園の理念は立ち上げてみたものの、実際にはこの五年間どうしてもこの両者は「対立構造」になりがちであった。しかし、今回保護者の方から「園でも家庭でも」という言葉が出たということの意味は大きい。保護者会直後、私と副園長のNさんは思わず顔を見合せた。「一人とも保護者会も第二ステージに入つたと直感したのである。

保護者会「フリーアジア会」の変遷——立ち上げ——

保護者会を立ち上げたのは今から五年前である。それまでこの園には保護者会はなかった。これは前回も述べたが「保護者会があれば保育のわからない親が言いたいことをいつてくる可能性があるので、あえて混乱が起ころうような場を作る必要はない」という考え方で立脚したものであった。しかし私は現代という消費社会・少子社

会に幼児を育てていかなくてはならない保護者の不安を受け止める場として、またそのような時代に専業主婦という役割を選んだ保護者が多い幼稚園として、子どもが幼稚園時代を送るときに保護者もまた幼稚園が一つの自己実現を遂げる場としての役割を果たせないかと考えていた。それと「閉じられた組織は必ず腐る」という思いもあり、保護者の会を立ち上げることで園の保育を開いていく道の一つとしたいとも考えたのである。

こうして立ち上げることにした保護者会であるが、そのときの保護者は「保護者会がないからこの園を選んだ」という人も多かつた。むしろ保護者会が立ち上がることは約束違反であり、とうてい許せないものだと考えた保護者もいたのである。しかしどもかくその必要性を説明し、初めは園側が取りまとめ役をするということでなんとか出発した。クラスからはクラス役員を出してもらい、月に一度の役員会を設けることにした。ここには副園長のNさんが張り付いた。また月に一度、学年ごとに園長・副園長との懇談会を開くことにした。ともかく話

そう！ それしかない。そんな気持ちでの出発だった。

保育参加ウイークの立ち上げ

園では以前は保育室に一つずつあつた観察室から子どもたちの様子を観察するという観察日が設けられていた。保護者は自分の姿を見られることなく園での子どもの姿を観察することができる。この観察室があることに惹かれて入園を希望した保護者もいた。しかし、一方的なこの観察の意味は一体どこにあるのだろうか。保護者としては自分たちがいないところで子どもたちがどのように過ごしているかを知りたいというごくごく単純な気持ちからこの観察室に魅力を感じたのであるが、見に来たことは子どもには内緒なので、そのことについて、

家庭で話すこともできない。そういうような観察は果たして親にとつても子どもにとつても意味のあるものなのだろうか。これが私の抱いた単純な疑問である。しかし保護者からは「自分たち親のいないところで子どもがどんな姿で過ごしているのかをぜひ見てみたい。園でどん

な生活をしているかが一番心配で、子どもにいくら聞いてもはつきりとしないので、この観察室からの観察はなきでほしい」と強く要求された。結局、この件に関連しては平行線のままであったが、観察室からの観察を廃止する代わりに新たに「保育参加ウイーク」を設け、年に二、三回園に遊びに来てもらう日を設けることにした。まだまだ園のなかでも保育の改革中でもあり、その途上で保育を保護者に公開することにはとても勇気がいった。が、やるしかない。引いてしまえば、そこに待っているのは断崖絶壁。もう前に進むしか道は残されていなかつた。

保育参加ウイーク○勝×敗の意味するもの

五年前の第一回の保育参加ウイークは五日間にわたって行つた。保育者にとっても保護者にとっても初めての経験である。午前中の保育参加のあと、園長・副園長との懇談会をもつた。その日、参加して感じたことを率直に語つてもらうためと、三学年の親が一緒に顔を合わせ

るチャンスでもあつたので、保護者同士が親しくなるチャンスとも考えたためである。この第一回目は本当に緊張した。子どもたちもまだまだ主体的に遊びを選んで過ごすということにも慣れていなかつたし、保育者もまた今までのようには決まりきった一日の流れを切り盛りする保育から、子どもたちが主体的に動けるように準備を進めるということにも慣れていなかつた。そんななかでの保育参加であつたから、おのずと批判がいっぱい出た。保護者も保育参加なので初めから子どもと遊ぶつもりで参加する保護者と、参加するつもりは毛頭なく、参観、つまりじつと観察していくつもりで来る保護者がほぼ半々であつた。保育参加後の話し合いで私たちの意図の伝わる日と伝わらない日があつた。私たちはその頃それを「今日は勝ちの日」とか「今日は負けの日」と言い合つた。保育を開き、「共に支え、つながり、育ちあう」という理想はあつたものの、実際の保護者との対応では「勝ち」「負け」という言葉が象徴するよう、保育者と保護者の関係は相対峙するものであつた。

保育参加ワークに仕掛けをする

第一回目を行つてみて、特に子どもと一緒にたくさん遊んでもくれた保護者からは大方「子どもと一緒に過ごして楽しかった」とか「いつべんに大勢の子をみなくてはならない先生の苦勞がわかつた」というような保育に対する肯定的な意見が多く出されたが、参観型の保護者からは保育に対する批判や、子どもの育ちに対する心配が多く出されたことがわかつた。つまり親たちは何もすることがないと、観察者の役割を担うようになり、ついつい子どものすることを否定的に捉えてしまうことがわかつたのである。見に来てもらつたことがマイナスになるのは意味がない。そこで第二回目以降は親たちが何か参加できるもの（例えばクリスマスが近ければ、クリスマスオーナメント作りを入れる等）を用意し、保護者自身も楽しめるようにとの配慮を行うようになった。これには準備がいるので担任の保育者は親にわかりやすい週日案（週間指導計画と日案が合体してある指導計画）

を用意したり、親が楽しめるコーナー作りをする等、かなりの準備と配慮をして保育参加ウイークに臨むようになった。案の定、保育参加後の話し合いでは「親も楽しめた」という内容の発言も多く出るようになつて保育参加を否定するような意見は少しずつ減つていった。

見せるための保育参加ウイークへの変質

こうして、保育参加ウイークに向けてはいろいろと準備することが定着していった。保育者の間には、普段の園での生活がこの保育参加ウイークの準備のためにどうしてもおろそかになつてしまふので、できたらやめる方向での検討を望みたいという声なき声が広まつていつた。結局年三回を予定していた保育参加ウイークは年二回、六月と二月に行うことになつた。日数も五日から三日へと減つた。一日に来る保護者の数が増えても参加日は少なく押さえてほしいと保育者は願つたのである。その間、保育者の準備はますます周到になり、以前のようにマイナスに捉える保護者の数は減つていった。三年目

になると、園の方針も口コミ等で少しずつ浸透するようになり、「いっぱい遊ぶ」ことをよしとする保護者が私たちの園を選ぶことも多くなり、初めの頃のような批判は段々に影を潜めていった。

保護者と保育者のすれ違い

二〇〇四年度の第二回目の保育参加ウイークは少し緊張したものとなつた。ちょうどこの年の生活発表会で四歳児のパフォーマンスがあまりにも「子どもたちのそのままの姿でありすぎる」ということで親たちからブレイングが起つた。私たちは四歳児の元気な姿が舞台に上がつてもそのまま出されており、それはどんなところでも自己を發揮でき

るという意味では

よいのではないか

と考えたのだが、それは保護者にはほとんど伝わらな



かつた。あまりにも元気な子どもたちの舞台を見ることで親たちは「子どもたちの園での生活面がどのようになっているのか」不安になつたのである。生活発表会から約二週間後の保育参加ウイークでは特に四歳児の親が子どもたちは元気に遊んでいるけれど、実際にどれくらい生活面でもしつかりやつてているのかを具体的に示してほしい等の意見が出された。特に幼稚園にそれを望むという声が大半であった。一方保育者の方では生活面がまだぐらぐらしている子どもたちは「家庭にもう少し協力してほしい」子どもたちであるという思いもあり、保護者と保育者間で、その溝を埋めるような動きはまだ出てこなかつた。

保護者を巻き込みながら

一〇〇四年度の反省を踏まえて、一〇〇五年度は保護者を巻き込みながら保育を行っていくことの重要性を再確認しての出発となつた。保護者会活動も活発化し、絵本クラブ、おもちゃ工房ビノキオ等の本格的活動も三年

目を数えるようになった。また四歳児のクラスでは保護者による読み聞かせの活動も始まつた。生活発表会に向けては保護者にも準備を手伝つてもらう等、保育参加ウイーク以外にも保護者が園で活動することも多くなつた。そんな中で一〇〇五年度の保育参加ウイーク二回目を迎えたのである。このとき、まずは保護者の方から「家庭でも園でも」という言葉が發せられたことは画期的であった。「保育を開く」ことを目指して保育参加ウイークを行つてきたが、今まで見てきたように、かたちは聞いていても、保育者が自己防衛に走つたこともあつた。しかし基本的にはボランティア形式で保護者の活動を活発化してきたことが、保護者と保育者がお互いを責め合わずにお互いに責任を担い合つて、子どもを育していくという姿勢を育ててきたといえる。たとえ行き届かないことがあつても、それを晒し、話し合うことが保護者と保育者の距離を縮める。いつの日にか「幼稚園にいつでもどうぞ」と保育者が保護者に言えるよう、小さな歩みを進めていきたい。